



受け身の研修ではなく、自ら解決策を見出していく研修 ～どの子も自らの力を発揮できる支援を求めて～

委員スタッフ 長野県稲荷山養護学校教頭 鶴田恵市

本委員会のテーマは、「インクルーシブ教育における多様な学びの場での個の教育的ニーズに応じた支援の在り方」です。本年度は、「小学校通常学級に在籍する自閉症スペクトラム児(ASD 児)への支援」と焦点を絞り、6回の委員会が開催されました。本委員会の意義や取組の概要について紹介します。

1 通常学級の先生に学びの場を

令和4年の長野県教育委員会調査によると、県内の小中学校に在籍する発達障がいのある児童生徒は、9786名です。これは全体の6.46%に該当します。そのうち、3785名(38.7%)の児童生徒は、通常学級に在籍しています。この数値は診断等を受けている児童生徒数なので、実際にはさらに多くの児童生徒が通常学級で特別な配慮を必要としているはずです。

だからこそ、通常学級での支援のあり方を学ぶ場が必要なのです。

〈調査委員会の概要〉

回	実施月	研修内容の概要	開催場所等
1	5月	研修スタートの会	信濃教育会館
2	6月	専門家から学ぶ①	オンライン
3	7月	基礎講座への参加	オンライン
4	8月	専門家から学ぶ②	オンライン
5	10月	先進校から学ぶ	東京都杉並区
6	12月	研修のまとめの会	信濃教育会館

2 自己課題から構成する研修内容

本委員会は、公募により委員が構成されています。本年度は、7名の小中学校の先生が委員となりました。本委員会のよさは、自分たちの困り感や学びたいことをベースにし、年間の研修内容をつくり上げていくことにあります。

初回の会で「日常の指導の中で困っていることや本委員会で研修・研究を進めたいこと」等を自由に話し合い、「専門家の講義で何を学びたいか」「先進校でどのようなことを学びたいか」といった研修会の内容を構想しました。このように構想された研修会だからこそ、課題意識をもって参加し、日々の実践に繋がるヒントや元氣を得ることができ、自分たちのニーズに応じた研修会を受講できる貴重な機会となりました。調査委員会の概要について紹介します。(第3回は、信濃教育会の基礎講座に参加しました。詳しくはHPでご確認ください)



第1回 研修スタートの会 各自が学びたいことの共有と研修会の内容構想

公募で立候補した先生は、小学校5名、中学校2名で年齢や経験年数はさまざまです。各自が抱えている困り感や学級の実態について紹介し合いました。「複数名の配慮が必要な児童が在籍している学級での学級づくり」「友だちにすぐに手を出してしまう児童や保護者への対応」「校内での支援共有のあり方」等が話題となりました。発表に向けて各自の困り感等をまとめることにより、自身の課題が明確になったようでした。また、今回は解決策を出し合うものではなかったため、普段はなかなか口にできない困り感を語り合う場ともなりました。各自の発表を受け、2回目以降の「専門家から学ぶ」の時間も一方的に講義を受けるだけでなく、個々の実践の困り感を質問する時間を設定したり、学級の様子について事例検討していただく時間を設定したりしました。

第2回 専門家から学ぶ① 講師：松本大学教授 樋口一宗先生

樋口先生からは、「困っている子どもを助けたいと思っている先生へ」というテーマで、ASD 児への支援として見落としがちなこととし、「ASD にこだわりすぎず、基本的な対応は他の子たちと同じ」「AD/HD や LD と重複している子どもたちも多い。重複していることを前提に対応する」「長所を生かし、困難は代替える」等を教えていただきました。その後は樋口先生とのディスカッションで、講義に関してさらに聞きたいこと、自分の学級の児童生徒と重ね合わせて質問したいこと等、1 時間を超えるやりとりが行われました。この時間がとても充実した時間で、オンラインではありましたが、参加している先生の「もっとお聞きしたい」という熱意が伝わってきました。

第4回 専門家から学ぶ② 講師：信州大学准教授 下山真衣先生

下山先生には、通常学級でインクルーシブな教育を行うために大切な点として、「インクルーシブ教育と特別支援教育の違い」「同世代の仲間との所属感が大切であること」等についてお話をしていただいた後、下山先生をファシリテーターとして事例検討を行いました。

事例検討では、事例を提供した A 先生と下山先生とのやりとりを通して、「A 先生が大切にすることは？」「そのとき〇〇さんは、何を思ったかと思う？」等、A 先生の取組の意味づけ、子どもの行動の背景要因の分析、今後の支援の方向性について参加者が一緒に考える時間となりました。下山先生からアドバイスを受けるだけでなく、A 先生自身が今後どのような支援をしていく必要があるかを自ら考える時間となっていました。他のメンバーも A 先生の事例を通して自身の実践を重ね合わせて意見交換をすることができた貴重な時間となりました。有効な事例検討会の進め方についても教えていただくことができました。

第5回 先進校視察研修 東京都杉並区立桃井第五小学校 講師：田中博司先生

「桃井第五小学校は、特別支援教育の研究校ではありません。都内のごく普通の小学校です」と案内をしてくださったのは、主幹教諭の田中博司先生です。田中先生は、特別支援教育コーディネーター（以下、特コ）として各地で活躍し、著書でもその具体例を紹介されています。校内を回りながら「職員連携のポイント」「学級集団と個を大切にすることのバランスや仕組み」等、具体的に教えていただきました。通常学級の中で当たり前のように配慮が必要な児童への支援が行われていることが分かりました。また、「特コとして学級担任や子ども達との関わり方」「特コとしての校内体制の作り方」「マルチ知能の考え方」（涌井 恵氏の実践を参照）等のお話を伺いました。参加したメンバー個々の視点で学校を視察し、今後の実践に繋がるアイデアをたくさんいただくことができました。



第6回 研修のまとめの会 各自の実践のまとめ「私の提案」の検討

最終回は、各自の実践を「私の提案」（信教の HP で紹介予定）にまとめ、今後の取組についての意見交換を行いました。これまでの委員会で学んだ具体的なことを各自の視点で実践に取り入れている様子が伝わってきました。悩みながら取り組んでいる先生もいましたが、5 月当初とは違い、何かしらの方向性を持ち取り組んでいる姿が印象的でした。メンバーの実践から学んだこと、講師の方から学んだことをそのままにせず、自身の学級の実態に応じて日々の実践に活かすことができていることを実感できました。

3 終わりに

本委員会のよさは、「受け身の研修ではなく、自ら解決策を見出していく研修」であるということです。個々の困り感や日々の実践について自分なりにまとめて発表する、自分の実践と重ね合わせながら講師の方やメンバー間でディスカッションをする等の経験を繰り返すことで、「この実践を取り入れられそう。自分は～してみよう」等、自分ごととして講義や他の先生の実践を活かすことに繋がったようです。

本委員会は来年度も予定されています。多くの先生が参加し、この取組が地域に広がることを願っています。